

The Master's 匠の技

はままつが誇る



亀山敏昭
Toshiaki
Kameyama

世界に轟く名声 神様が愛したマウスピース

マウス
ピース
職人

本物に出会う。
極みを知る。

世界の一流アーティストたちが求める、本物の音。それに応える素晴らしい楽器を数多く生み出してきた、至高の楽器職人たちの人生に迫る。

「すべての奏者に良い音を」

ヤマハ在籍中、高級管楽器の開発と普及のため、30歳でドイツへ渡った亀山さん。現地のプロの演奏家から要望を聞くうちにマウスピースの製作を始めると、評判になった。多くの人に喜んでもらえたとき、「これは自分の天職だ」と思いました。渡独して3年が経った頃、モーリス・アンドレ氏が噂を聞きつけ、マウスピースを作ってほしいと依頼してきた。アンドレ氏は出来上がったマウスピースを高く評価し、亀山さんの名声は世界に広がっていった。

50歳で早期退職制度を利用しヤマハを退職した亀山さん。浜松に工房を構え、職人として生きる道を選んだ。「都市部であればお客さんはたくさん来ますが、それでは忙しくなりすぎてしまう。大事にしているのは、一人ひとりの相手をよく知り、信頼関係を築くこと。作りっぱなしはダメ。アフターケアもきちんとしてないと。プロ、アマを問わず、多くのお客さんに喜んでもらえることが、自分にとっての喜びです。すべての奏者に分け隔てなく良い音を提供しようとする姿勢。決しておごることはない。名工とは、かくあるべきだと教えてくれた。

若い職人たちに向かって伝えたいことがあるか問うと、こんな答えが返ってきた。「今後はどこかに技術とセンスのある若い人がいれば、自分の培ってきたものを継承し、後継者を育てていきたいと考えています。名工の技術を継ぐ若者の出現を、ただ願うばかりだ。



ドイツ時代、モーリス・アンドレ氏との記念写真。友人としての付き合いは、アンドレ氏が亡くなるまで生涯続いた。



工房内に置かれた様々なメーカーのサンプル用マウスピースは500種類近くある。サンプルをもとに、演奏者の要望に合わせて独自の型に削っていく。

繊細を極める
1/100ミリの世界

「トランペットの神様」といわれたトランペット奏者の最高峰、フランスの故モーリス・アンドレ氏に絶賛された腕を持つ名工が、浜松にいます。JR浜松駅からほど近い下シ・トランペット・アトリエを一人で営む、トランペット・マウスピース職人の亀山敏昭さん(66)だ。

その卓越した「音づくり」の技術は世界的に有名。亀山さんの作り出す「音」を求めて、わざわざ海外からマウスピース一本の加工のために浜松を訪れる演奏家もいる。トランペットのマウスピース加工は繊細を極め、1/100ミリで音が変わってしまうという。素材を削りながら作業のため、後には戻れない一発勝負だ。この世に同じマウスピースは二つと存在しません。職人の経験から生まれる厚みのある言葉は、国内外を問わず多くの演奏家から信頼されているという自信を感じさせてくれる。

名工のこだわりは 「木と会話する」×「スペイン製法」

手作りだからできること

2007年、厚生労働省の認定する「現代の名工」を受賞したギター職人の伊藤敏彦さん(67)。ギター職人としての受賞は、世界的に知られている故・矢入一男さんに次いで二人目となる快挙といえ、ギターフリークには偉業の程がわかるだろう。伊藤さんが今までに製作したギターは1500本以上に上り、ポール・サイモンさんや長瀬剛さんをはじめ、国内外を問わず数々のアーティストに愛されてきた。ヤマハを定年退職後、浜松市南区の自宅横に小さな個人工房を構えた伊藤さん。噂を聞きつけたギタリストたちがギター製作の依頼をしてくるが、大量注文を受けるとはしない。「大きな工場ではできない、手作業だからこそできるギターを作っています」。チャーミングな笑顔からは想像し難いほど、細部にまで徹底にこだわった製作工程。納期を定めなことが受注の絶対条件だ。

人生を捧げたギター作り

17歳で日本楽器製造(現在のヤマハ)に入社した伊藤さん。入社したきっかけを聞くと「勉強が嫌いだったんです」と満面の笑み。温かみのある音は、温かみのある人から生まれるのだろうか。入社後ほとんどギター製作の部署に配属。見よう見まねで作ったギターは生来の手先の器用さも手伝い、先輩よりも見た目の形が良かったという。「見た目は良かったんですけどね。弾いてみると先輩の方が断然音がいい。悔しくて熱心に研究しました。何度も失敗を重ねるうち「木と会話しながら作っていく」という図面に書いてない独自の製作手法を考え出したという。「木は叩けば一つひとつ音が違うんです。工程ごとに逐一叩きながら作っていく。つまり、木と会話しながら作ります」。気付けばすっかりギター作りに没頭していたという伊藤さん。より良い音、より良いギターを追求し続けた。

ギター
職人

伊藤さんが現在手掛けているフォークギターは、スペインのクラシックギターに見られる独特な製法で作られている。「この製法は非常に時間と手間がかかるんです。生産性や儲けを重視したら、まずやっつけられない。日本でこの作り方をしているのは、おそらく僕だけじゃないかな」。数を重視することはない。そこにあるのは、ギター作りで人生を捧げた伊藤さんの「職人魂」だけだ。

伊藤敏彦
Toshihiko
Ito



思い出の一枚



ヤマハ時代、伊藤さんの作ったギターのチェックをしていたプロギタリスト中林淳真の「いやしのギター・中林淳真の世界」。ギターの音色も大好きだという伊藤さんが、常に車に積んでいるお気に入りの一枚。ドライブ中に聴くという。



現在製作中のフォークギター(写真中央)。受注したのは一年前、完成は来年以降だという。注文者の依頼に完璧に応えるため、時間をかけ丁寧に仕上げている。

伊藤ギター工房
浜松市南区白羽町756 TEL.053-441-2031

トシ・トランペット・アトリエ
浜松市中区砂山町362-23 TEL.053-458-4143
<http://www.toshi-tp.com/>



Hamamatsu Music Spirits
The Master's



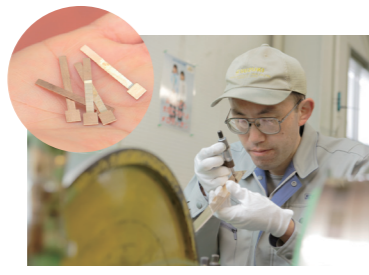
1 厚生労働省認定「現代の名工」受賞時の盾 2 スペイン式クラシックギターの制作過程。ボディの外側から木を叩き、音を確かめながら調整を繰り返す。



世界初の鍵盤ハーモニカ「メロディオ」

力を抜きたいとき、ゆるい感じを出したいとき…癒しの音色がアンデスの魅力。楽曲に独特の世界観を生み出してくれる。

■アンデス25F 限定カラー
(ベッコウ柄・ピンク迷彩柄) 16,800円(税別)
各300台限定・2014年11月29日発売



鍵盤ハーモニカの音を出しているのは、鍵盤の裏に取り付けられた「リード」という薄くて小さな金属板。リード職人・水江さんの手により、2ミクロン(1000分の2ミリメートル)の精度で削られている。熟練の職人技だ。

「ドレ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ド」。日本人が初めて音階を学習するときに使用する「鍵盤ハーモニカ」を使った音楽の授業の光景は、全国各地にとって共通の記憶だろう。

実はこの鍵盤ハーモニカも浜松生まれの楽器。1961年、浜松市でハーモニカ製造をしていた鈴木楽器製作所の創業者・鈴木萬司さんと社員が一丸となり、試行錯誤の末、世界初の鍵盤ハーモニカ「メロディオ」を完成させた。現在では日本だけでなく、北米や南米、アジア圏や

欧州諸国、オセアニアや果てはアフリカまで、世界各国で愛されている。

『創造の心』を大切にしている同社は、新しいことにも挑戦し続けている。鍵盤楽器なのに笛の音が鳴る鍵盤リコーダー「アンデス25」も、同社が初めて製造。一旦は生産を取りやめたが、根強いファンへの要望に応え、2007年に復刻。ニュースに取り上げられ話題を呼んだ。

「やさしさ」と「温かさ」のある鍵盤ハーモニカの音色と鈴木楽器製作所の魅力は、まだまだ尽きることはなさそうだ。

株式会社 鈴木楽器製作所
浜松市中区領家2-25-12 TEL.053-461-2325
<https://www.suzuki-music.co.jp/>



リコーダー、タンブリン、トライアングルなど、さまざまな教育用の楽器を製造している。

あの楽器も! Made in 浜松

どこか懐かしいあの楽器も、実は浜松生まれ! 温かみのある音色には、職人魂と歴史が詰まっている。

伝統の技を受け継いでいきたい

「使う人にきちんとしたものを届けたい」と語るのは、昭和楽器製造2代目社長の酢山義則さん。近代的な機械によるオートメーション製造ではなく、昔ながらの「手作り」にこだわりの「音作り」にこだわって、音程の誤差を極限まで無くしたハーモニカを作り続けている。

近年の昭和楽器製造のヒット商品は、浜松発祥の楽器である「ミニハーモニカ」。長さ35ミリの超小型サイズながら、しっかりと1オクターブの音階があり、小さくてもきちんとした曲を演奏できる「楽器」だ。

ミニハーモニカのライン



「正確な音」にこだわり続ける酢山さんは、調律も自ら手作業で行う。演奏者の喜ぶ顔を思い浮かべながら、一つひとつ丁寧に仕上げている。



■天使の卵 ミニハーモニカ 卵型ケース入り 2,500円(税別)
C調に正確に調律された4穴8音のストラップ型ミニハーモニカ。浜松の観光土産として手軽に購入できる。

昭和楽器製造株式会社
浜松市中区上島1-8-55 TEL.053-471-4341
<http://www.syowagakki.co.jp/>

The Master's

触れずに奏でる電子楽器

緑の木々に囲まれた美しい浜名湖の畔に、ひっそりと佇むようにあるマンダリンエレクトロンの代表取締役・竹内正実さん(47)は、浜松から世界に向けて新たなカルチャーを発信し続けている。世界最古の電子楽器「テルミン」の演奏者でありながら、教育者でもあり製造職人でもある彼を一言で形容するのは難しいが、あえて言葉を遣ふなら「テルミンの伝道師」といったところだろうか。

テルミンは今から約100年前、ロシアのレフ・テルミン博士によって開発さ



竹内正実
Masami
Takeuchi

ギネス記録「最大のテルミン演奏」を生み出した「テルミンの伝道師」

れた。本体から発せられる微弱な電波に対し、手を近づけたり遠ざけたりすることで、本体に触れずに音程や音量を調整する特殊な楽器だ。定められた音階はなく、手を近づければ音が高くなり、遠ざければ低くなる「音量も同様」。曲を演奏しようと思えば、何の目印もない空間の中で音階を探り当てなければならぬ。「慣れればそんなに難しくはないんですけどね」。竹内さんはそう言いながら、一曲演奏してくれた。曲は「星に願いを」。バイオリンのようなオペラ歌手の歌声のような豊かな響きと、何とも言えぬ抑揚のある独特な音色。心に響く演奏だった。



「マトリョミン」の開発 ギネス世界記録への挑戦

大阪のクラシック音楽ホールで録音の仕事をしてきた竹内さんは、テルミンを学ぶため26歳でロシアに渡った。きっかけは、世界的テルミン奏者クララ・ロックモアの演奏を聴いたことだ。「それまでは、テルミンは玩具のようなものだと思っていました。しかし、クララ・ロックモアの演奏は、毎夜聴いていた一流の演奏家に引けを取らないくらい素晴らしいものだったんです。自分の進む道はこれだ、と確信し、ロシア行きを決めたという。

帰国後、テルミン演奏者として活動を広げていた竹内さんは「テルミンをポップカルチャー化したい」という思いから、ロシアの工芸品マトリョシカにテルミンの機能を備えさせた「マトリョミン」を2000年に開発。そして2013年、それまでの普及活動の成果を形にしようと、自身の弟子や孫弟子、テルミン愛好家を全国から浜松に集め「最大のテルミン演奏(テルミンの「音演奏」というギネス記録に挑戦した。さまざまな規定をクリアし、見事マトリョミンによる272名の「音演奏」で世界記録の樹立に成功したのだ。

「僕らの活動は例えるなら、草木の生えない荒野に井戸を掘り、街を作っていくような感覚です。テルミンはまだシーンが若い。今まさに僕らが知恵と情熱でシーンを作っている、それが非常に面白いんです」。竹内さんの街づくりは、これからも広がっていくことだろう。



思い出の一枚

竹内さんの人生を変えた、世界最高峰の女流テルミン奏者クララ・ロックモアの「サ・アート・オブ・テルミン」。テルミン入門者にもおすすめの一枚だ。

有限会社マンダリンエレクトロン
浜松市西区村棚町4598-9 浜名湖国際脳センター・南棟2F 10号
TEL.053-488-1920 <http://www.mandarin-electron.com/>



1 マトリョミンを組み立てる竹内さん。マトリョシカは本場ロシアから輸入したものを使用している。2 ギネス記録樹立時の記念写真。演奏の動画は「YouTube」で視聴可能。3 テルミンを演奏する竹内さん。左手で音量を、右手で音階を、自在に操る。